

SF 的読み解き

子どもという風景

第三十九回

玩具の舞台

堀内 守

跳びはねること

こういう忙しい時代ですから、本を読み直すなどということはあまりなされないようです。愛読書や座右の書などは少なくなってしまったのか、と思っていました。ら、反論されました。反論したのは近所に住む中学生。曰く、「教科書を毎日繰り返し読んでいます」とのこと。



まさに一本参ったというところでした。そうでした。教科書は、いや応なしに読み直すものでした。

それに乗るように、小学生も解説してくれました。「国語事典を毎日引いている」由です。目下、「辞典」を引くのを教わったばかりで、どんなページを開いても、辞典式の説明が楽しいのだそうです。わかる。わかる。

そういう新鮮な時期があります。だれでもそういう経験を持っている。またいつになっても持ち続けている人もいます。くだんの小学生のことは借りますと、「いちばん面白いのは、辞典（ここで彼は、「事」と「辞」の双方のあることを自慢そうに教えてくれました。「事典」と「辞典」を「辞典」で引いてみて楽しかったと説明してくれました）の説明のしかたが四苦八苦するところにぶつかった時だ」そうです。

たとえば「石」を引いてみると、「①岩石・鉱物の総称。②堅い物事や、がんこな心、冷たい心などのたとえ」とあって、「石」が急にむずかしくなったり、ヨソ行きになったり、とんでもないところへ跳びはねたりする——「説明の方がむずかしくなるなんて、おかしいや」というのです。

ごもつとも。直観的にわかっていることを、あらためて解説するときのむずかしさに似ています。「これがそれです」といって、さし示すことができるものを、あたかもそこないかのようにして、ことばだけで説明する

のは大変なことです。小学生君も、そのことはちゃんと知っています。その上で、辞書を引いてゲームをやっているのでしょうか。

このゲームは、実はしばしば起こるのですね。幼児などはこの種のゲームの妙手です。名プレイがあり、珍プレイがあります。

去る日、わが書齋に入り込んだきた親戚の幼な児は、「この本、みんな読んだの？」とたずねました。「こんなにたくさん買ってもらって。何回も読んでいれば、こんなにいらぬのに」と、こちらをたじろがせる意見をのべました。本の上に腰をおろした彼女は、立ちあがるひょうしに、その本のかたまりをつきくずし、大声をあげて泣き出しました。

すつとんできた彼女の母親は、この乱雑な書齋なるものをあきれた顔つきで見まわし、「書齋というよりは仕事場ですね」の一言を残し、その子とともに去りました。

これもまたみごとな評価です。「書齋」と彼女が思っ

ているものは、きっとわが部屋とはまったく違う立派な部屋なのでしょう。「仕事場」どまりでよろしゅうございませう。「これではまるで物置きですわね」などといわれなかったのが救いというもので。

とはいふものの、「物置き」に近いのが実状なのですから——と、見れば、あの幼な児がつきくずした書物のページが開いていて、そのページが意外なことを語りはじめたのでした。

本当は、この本がくずれたのは、彼女が跳びはねた時でした。それを暗示したかのように、そのページには、
〃真の遊戯性とは、動物であると人間であるとを問わず、幼ない生き物をもつ跳びはねにある〃と記されていたのです。意外な符合に驚きつつ表紙を見返せば、そこには何と、プラトンの名があり、『法律』という書名がありました。

柔らかに着地せよ

プラトンがあの子を挑発し、この一節を読めと小生に

命じたのでありませう。そういえば、何となくあの幼児の言い分がふるっていました。繰り返して読め、とも、熟読せよ、とも、再読せよ、ともとれる意見を口にしていましたっけ。その口調までまだ耳に残っています。考え過ぎかな。

これは、これは、まことに恐れ入った、とばかりにプラトンの『法律』の一節を味読すれば、チンプンカンプンとはまさに反対で、明快、明晰、驚き、桃の木、サンショの木。とてもいいことが記されています。

プラトンはいいです。真に跳躍するためには、二つの仕方を学ばねばならない。すなわち、大地を跳躍台として使うことと、柔らかに安全に着地することの二つである、と。さすがです。双方をいっしょに学ばなければいけないといっているのです。ことに、後者の表現がよろしい。柔らかに、安全に着地すること。要するにふーわりと着地せよ、ということです。まるでスローモーションで見たかのようなプラトンの言い方です。

続けて記されているのは、その重点がどの辺にあった

かを読み解く上で重要です。プラトンが語っているのは、まず幼い生き物についてでした。この遊びが年齢を加えるともにもどのように変わっていくのか、に思いを致すとき、遊びがしだいに「気晴らし」に変わっていく、何やらひどく理屈っぽくなった論が増加していくように思えます。子どもの遊びに関する文献は挙げるのとまのないほど多いのですが、「遊び」に関しては愛憎こもごもの見方をしています。発達理論は、子どもの遊びを成長と発達のための不可欠な条件と見なしていますし、もろもろの臨床理論は、子どもの遊びを重苦しい内面的問題の解決のための手段と見なしてきました。

「お遊び」などといういい方がましているように、「遊び」ということばには、ごま化しと見せかけというような意味で使われる場合もあります。

ひとつ、もういちど跳躍してみても、それからゆるやかに、柔らかく着地してみようではありませんか。

配列のしかた

子どもの遊びを見直してみましよう。まずさまざまな玩具を子どもがどのように配列するか見てみませんか。ありふれた風景ですが、見直せばまだまだ知られていない意味が浮きあがってくることでしょう。

玩具を前にして子どもたちは、遊び半分とは逆に、まるで仕事に立ち向かっていくように真剣に取り組んでいます。まるで、それらを適正に配列したり、組み合わせることができのを楽しんでいるかのように。時には、そのやり方を知っているのを誇示するかのよう。出来映えが問題なのでしょう。出来映えを慎重に確かめつつ、ある最終の完成像を心の中でもっているかのよう、自分の手もとをその像とたえず比較考慮していくように。

はじめは頼りない手さばきだったのに、ある段階でひとりごとを言いはじめ、しだいに寡黙になって取り組んでいく。ある動かしがたいテーマをつかんだかのごとく。

ここにはひとつの「物語」が誕生します。つぶやきな

がら、手先で材料をひねりながら、子どもがある物語に
そって組み立てていくのが読みとれます。玩具を何かに
仮想し、主人公や場所を想像の上で決定し、ばらばらだ
ったものを一つの流れと意味をもった物語に仕立てあ
げ、そのなかで、さまざまな経験を紡いで、織りあげて
いくのですから。してみると、ひとりごとであれ、つぶ
やきであれ、それが表現していると見えるもの以上の意
味をもっているといわねばなりません。

大まかにいって、それを解釈する仕方は三つほどあり
ました。子どもの遊びをすなおに見ている人にとっては
驚きでしょうが、子どもの遊びがどのような意味をもっ
ているのかを読み解く理論が競い合って体系化されてい
きますと、ある臨界を超えるあたりから、それぞれの合
意の場はなくなってしまう。ある遊びが、まったく
別々の意味をもったものとして解説されていきます。主
な解釈法は以下のとおりです。

まず「外傷」理論とでもいうべきものがあります。そ
れによると、子どもの遊びは、過去にあって十分処理さ

れなかった諸経験を、あらためて反復し、満たされな
かったものをあらためて充足することだ、ということにな
ります。あるいは、受け身だった態度から積極的な態度
への変換をもたらすものは、古いキズがきっかけになっ
ているのだ、ということになります。

また「カタルシス」理論とでもいうべきものがありま
す。ウッセキした情動を解放し、あとでさっぱりするこ
と。たまっていたものを放出し、さばさば、すっきりす
ること。それをもたらすのが遊びだ、ということになり
ます。なるほど、この説明をきいていると、無我夢中に
なって遊びほおけることだとか、真剣に物語をつくって
いること、などは落っこちてしまいうすね。さっぱ
りとした。あとは遊ばなくていい。そういうことになっ
てしまいますから。

別のものへの準備のため、遊びのなかで次の新しい能
力をトレーニングしているのだ、というのが「機能」理
論による説明と呼ばれているものです。

いずれも、ある面を説明してくれるのですが、遊びの

なかで主体がさまざまなことを演じ、そのことによって生まれかわっていくところを見る必要があります。よう。自己表現のよろこび、創意と奔放などによって遊びはもっと多彩になっていきます。別の表現をするならば、活動的になること、生き生きすることであります。実存哲学者ならばきっと「よみがえり」と呼ぶことでしょうし、宗教家ならば「復活」と呼ぶことでしょう。まさに「再生」であります。

雛型の創造

お雛様とはまた何という心にくい命名でしょう。雛祭り、雛菊、雛壇等とありますように「雛」とは、もともと「ひなどり」「ひよこ」に発し、「ひな人形」に転じました。その他「養成中の新人」をもさします。

この一連のつながりも面白いのですが、「雛型」となりますと、「実物と同じ形に小さくつくったもの、模倣型」という意味です。

子どもの遊びのなかに見られるように、遊びは「生き

生き」すること。頭と身とを活気づけることに通じていました。まさに、いまはやりの表現の「活性化」です。

ならば、その「活性化」にはかならず演劇的な構造が下絵になっているはず。空間的にも、時間的にもその広がりには多様です。そして「演劇」が示すものは、根底に「……と見なす」という人間固有の能力がある、ということにはかなりません。たとえば石を見て山の形に似ていると思ったり、山を見ては船の形に似ていると思ったりするなど、あるものを見て、それとは別のものを感じる力です。

巻頭でご紹介したプラトンの説は、いかにも古典ギリシア時代にふさわしく「跳びはねる」という表現でした。今日なら「飛躍」であるとか、あるいはもっとテクノロジーの時代を反映してか、「離陸」、「テイク・オフ」などがこれにふさわしいのではと思います。この「ふさわしいのでは……」を思いやること、思いを駆せること、あらぬことを思うこと、なども、「と見なす」から広がっていきます。視覚的な「と見なす」もあれ

ば、幻想的な「と見なす」もあります。

この「と見なす」が形をととのえたものが「雛型」です。その「雛型」は、またさらに次なる「と見なす」を触発し、誘発していきます。

「と見なす」力は、仮説の方に向かったり、詩の方に向かったり、ウソの方に向かったりいたします。

さて、ここまできて、ふたたび振り返ってみますと、「遊び」という用語には何という多様で、矛盾した文脈がまつわりついでいることでしょうか。英語の「プレイ」の方を例にとるならば、それこそその広がりには日本語の「遊び」よりも広がるはずです。「演ずる」から「あざむく」「デザインする」「交渉する」「たくらむ」にいたる用語が目をあざむくかのように姿をあらわしますもの。つい先ごろも、ある大論文のなかで、つぎのような一節に出会って思わずはっとさせられました。それは、「このように核兵器が増えてくると、子どもが玩具を早く使ってみたく思うのと同様に、核兵器を使ってみたくなる人間があらわれぬとも限らない。云々」という

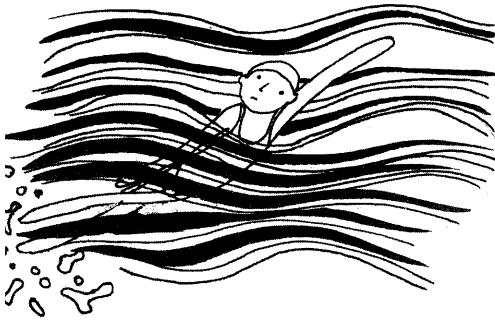
ものでした。

驚きは二重です。第一は、「核兵器」の存在が使いたくなる人間をつくり出すかもしれないという予想に関してです。可能性があるかもしれませんが、ないかもしれません。確率を求めても安心はできないでしょう。ですが、右の「大論文」の結論部としては何度読んでも、いささか不用意な比喻ではなかったかと思われるものが「子どもが……」の部分です。さらりと読めばひっかかることもないところですが、小生には意外に思えました。

しかし、いろいろ考えているうちに、この一節をきっかけに、ひとつの「離陸」を試みることができました。「と見なす」力というのは、いったい人類の進化のどのあたりで現れたものなのかというところでもない疑問です。ふだんは思いもかけないのですが、たまたま右の「大論文」に出会い、はてな、と首をひねったからかもしれません。でも、ホントは進化のどのあたりか、よくはわからないのです。法定的な答えはありません。それ

なのに、「進化のどのあたりで……」と考えることのできるのも「と見なす」力なしにはありえませんが。

ともあれ、「と見なす」の始源の形態は、進化の上ではたぶん儀式という形をとったに違いありません。ナマの形で世界に接するよりは、イメージや観念によって、ナマの形を加工し、変形させ、それをウィジョンで広げて、その中の自分の位置をきめていく。それなしにはヒトの存在はなかったことでしょう。



そこには確実に「飛躍」があったはずですが。

飛躍

個体発生的に見ていく場合でも、その「飛躍」がある
と想定（「と見なす」）してみなければ説明がつきませ
ん。検証ができるかどうかということと、説明をつける
ということは、この際、別です。

ゲームや儀式の数々をよく見てごらん下さい。玩具や
ルールや舞台や儀式
は、ことごとく「と見
なす」ことで生き生き
してくるように見えな
いでしょうか。

ヒトの身体は、ひと
つの開放系をなしてい
ます。リズムがありま
す。意識がまだ胎動を
開始する以前に、身体

は胎動を開始しており、その胎動は、響鳴したり、響応したりして、たがいに補強し合います。その過程で、まわりが少しずつまとまった姿をとりはじめ、懸念や衝動や外傷や空想を誘い出すのです。たぶん〈私〉という意識はその過程で生み出されるのでしょう。

生み出された〈私〉は、経験をまとめあげ、日常生活のなかで「……と見なす」という約束事がたくさんあることを発見していきます。雲が泳ぎ、鳥はうたう。小川がささやき、花がほほ笑む。これらも「と見なす」の一例です。が、面白いことに、「と見なす」という約束事は、それ自体としては姿を見せないのです。それは、いわば子どもの行動のシナリオの源泉のようなもので、たえずシナリオをつくり出すけれども、姿はあらわしません。つまり、右の例でいえば、「鳥はうたう」とはいかなることであるか、などと、あらためて問うことなく、そのまま受容し、受容を楽しんでいるのです。

① 鳥はうたう。

② 鳥はうたうとはそのように「見なすこと」である。

③ 鳥が鳴く。

右のように、三つの枠に区分けしてみましよう。そうすれば、③はふつうの述べ方であり、①は表現を楽しむことを含み、②はそれを分析していることが一目瞭然です。そしてことばの世界は、これらの水準を往還しながら〈私〉の世界を広め、まわりの人びととのつながりを広めたり、深めたりしていくことにはかなりません。いや、むしろ発生的には、まわりの人びとの方がより根源的です。まわりの人びとが語りかけてくれ、名を呼んでくれ、〈私〉の反応をいちいち認めてくれるがゆえに、〈私〉は目覚めさせられたのですし、応答というドラマの楽しみを身をもって演じているのですから。

そのドラマの楽しみを中心に生きているものは、ものごとを自分なりの仕方、しかも組織的に見る、ことです。思考様式の活性化から友情の形成まで、自発的に遊

びながら再構成し、ジグソーパズルのさまざまな形で遊び続けるのに似ています。

見ることに。それにもさまざまなレベルがあります。先の例でいえば、「鳥が鳴く」と見るのも一つの見方です。また「鳥がうたう」と見るのも一つの見方です。じろじろ、ぎらぎら、にこにこ、ちらりと……その副詞は見ることの多様なあり方を示しています。

人間は、どんな仕方をとるにせよ、自分に合った仕方です、すっきりした世界像を自分でつくろうとします。経験の世界をこの世界像に合わせてつくり変えてみて、経験の世界をのり超えようとしています。絵を描くとき、文章を書くとき、考えるとき、人間はこのイメージに頼り、個人的な経験というせまい世界では見出しえない落ちつきをうるために。

本来、〈私〉は、中心を欲しがります。中心がはつきり手ごたえよろしく見えているとき、能動的に働いているとき、選択し意識し、包括的に見ているときには「鳥が鳴く」よりも「鳥がうたう」という方が落ち着きを喚

起します。しかし、他方、経人的経験なるものは、混乱し、渦巻いて、〈私〉を揺り動かし、落ち着きを与えてくれません。そのような場合、〈私〉は、自分がそもそも何に依拠しているかをみずからに問うていき、あの「……と見なす」というスタートラインに気づかされるのです。〈私〉の根拠がこういう不安定な根拠にもとづくという発見は、ある意味では驚きですが、それはまた別の発見の驚きにも通じています。前者の驚きが冷静に見つめたことの結果だとすれば、後者の驚きは、ほかならぬ〈自分〉が数え切れぬ大勢の他者に支えられ、それによって落ち着いていられるという感謝の念に導くからです。

(名古屋大学)